

令和4年度に向けて

令和3年は、春先の低温により出芽のムラや遅れ・田植え後の活着不良に伴う初期生育不足等が見られました。6月以降の高温により、その後の生育は概ね順調に推移しましたが、弱小分げつが多く発生したため、籾数が過剰となり登熟歩合の低下につながり、収穫量のほ場間差が非常に大きい年になりました。

近年は田植え時期により収量が大きく変動する事例が見られることから、健苗育成（活着良好な苗）、適切な田植え作業（時期、栽植密度、植込本数の確認、植付深の調整等）、生育・気象条件に対応した水管理（浅水、深水、適期中干し）等、基本的技術を徹底し、収量・品質の安定化を図りましょう。

気候変動リスクを軽減する総合的な土づくり

高品質・良食味米を安定的に生産するためには、排水性の向上や土壌養分の均一化、地力の増強や深耕によって根を健全に保ち根域を深く拡大させ、生育途中の急激な葉色低下や生育の停滞を防ぎ、登熟後半まで根の養水分吸収能力や光合成能力を高く持続させることが重要です。

そのためには、肥料散布だけでなく、総合的な土壌改良が必要です。土づくりは、すべてのことをやったとしてもすぐに結果が見えてきにくいですが、続けていると土は必ずあなたの米づくりを支えてくれます。先代からの土地の癖と、勘、定期的な土壌診断等による科学的な知識を組み合わせて、バランス良くできることを実践してください。

排水・透水性改善

耕深 15 cm 確保

土壌診断

ケイ酸補給

有機物施用

各取り組みを総合的に実践し、米づくりの土台を盤石なものに。

水管理による適正な生育量の確保

一発型肥料の使用が多くなっている昨今、本田の水管理は、安定して作柄を確保するためにますます重要性が増しています。特に初期生育の良否は、その後の生育量や出穂時期、収量にまで影響します。また、年々、中干し開始時期が遅くなっており、十分な中干しができないほ場も見受けられます。その年の気温の変化に対しては、水管理で対応するしかありません。暑さ、寒さに負けず実らせるためにも、こまめな水管理を心がけましょう。

畦畔補修による水田ダム化

浅水で気温日較差を大きくし初期分げつ促進

中干し開始時期の判断

高温時は地温と根を冷やす水管理

雑草対策

近年、生育後半におけるノビエ等の発生が目立つほ場が散見されます。雑草の多発は害虫の発生量にも影響するほか、多発したほ場は越冬種子量が多いと考えられるため、除草剤を適期に効率的に使用して、翌年に残さないように雑草防除の徹底を図る必要があります。

ノビエ・ホタルイ徹底除草

適期散布

登録内容遵守

散布時の水深

除草剤の選択

水と生態系への配慮 for SDGs



No.7

農業技術情報

令和4年1月発行

発行：秋田おぼこ農業協同組合／秋田県農業共済組合仙北支所

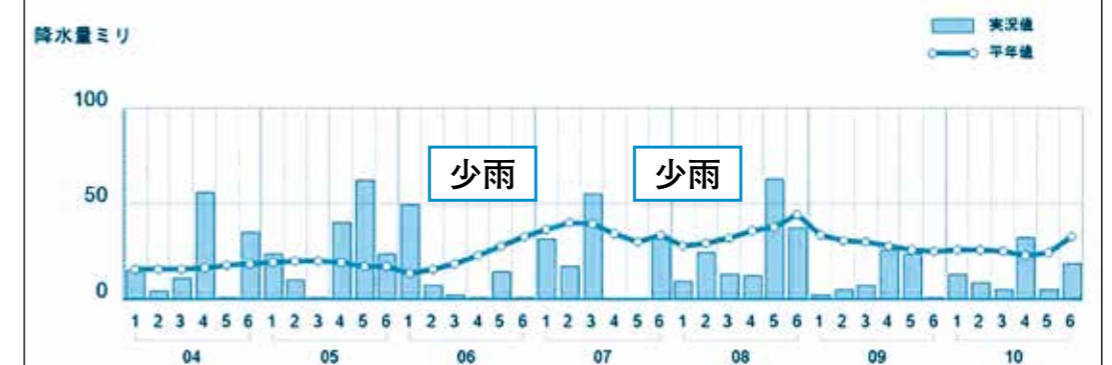
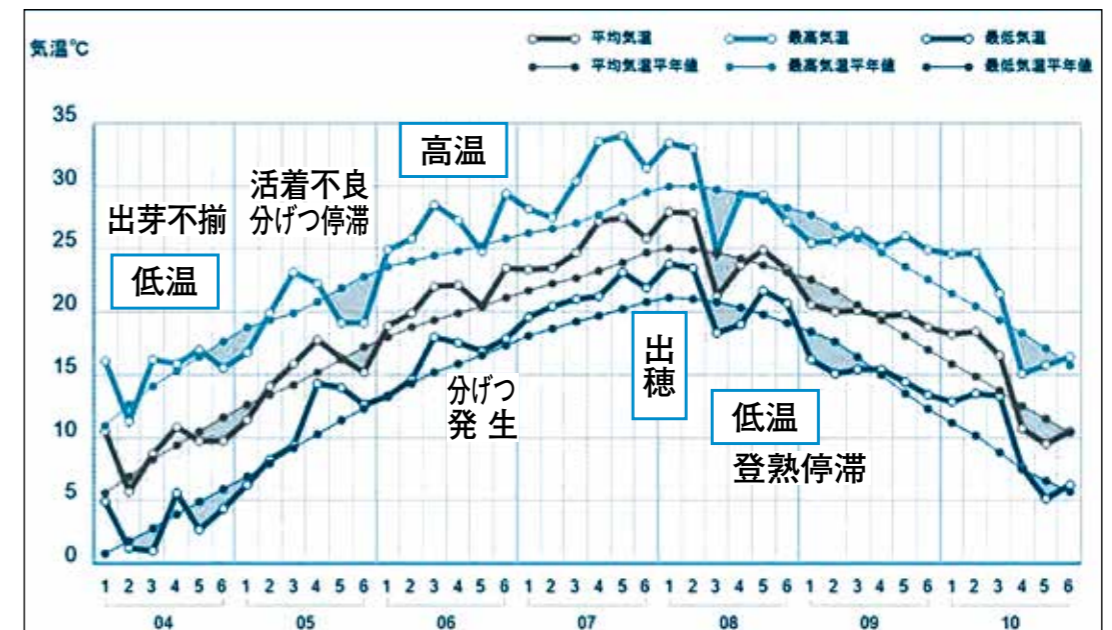
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課



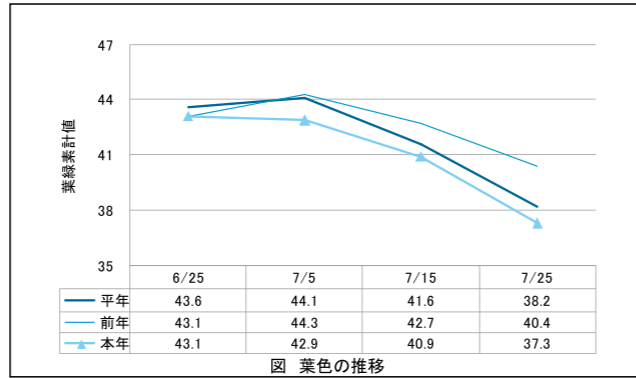
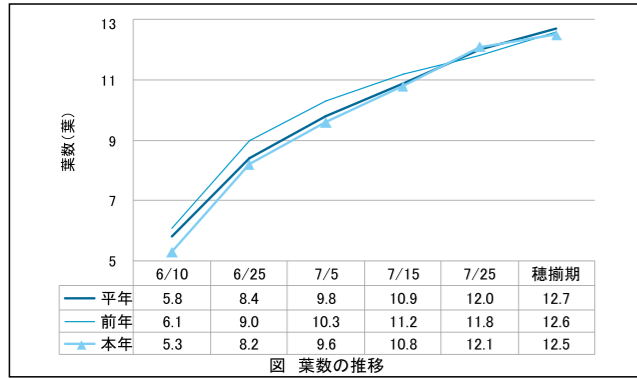
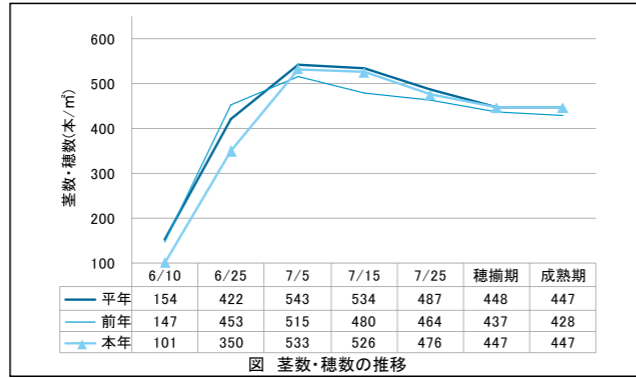
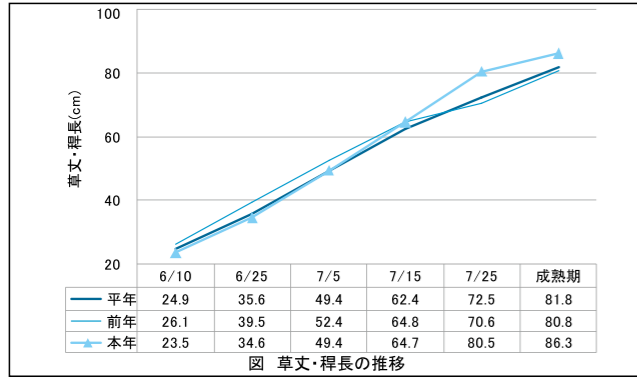
令和3年度 総括版

令和3年の稲作を振り返ります。皆さん自身の作業を思い出しながら、来年の対策を考えていきましょう。

令和3年度気象経過 (令和3年4月～10月、半旬別、アメダスポイント大曲)



生育概況



4月

本年の播種盛期は4月25日(平年差±0日)でした。4月下旬の気温が平年より低かったことから出芽のムラや遅れが見られました。一方、この期間の日照時間は多く推移したことから、ハウスの開放の判断が難しく、徒長や葉ヤケ症状を呈した事例が見られました。5月上旬以降は気温が平年並から高く推移したことから、出芽後の苗の生育は概ね順調でした。4月下旬に降雨が多かったため、耕起作業盛期は5月5日(同差1日遅い)とやや遅れました。

5月

本年の田植始期は5月16日(同差±0日)、田植盛期は5月23日(同差±0日)と平年並に推移しました。田植始期頃は高温・少照でしたが、田植盛期頃は低温・少照で推移したことから、地温・水温が上がりにくい条件となり、活着に時間がかかり初期生育確保に苦労したほ場が見られました。

6月

定点調査ほの6月10日の草丈は短く(平年比94%)、㎡あたり茎数はかなり少なく(同比66%)、葉数は少なく(同比-0.5葉)となりました。6月25日の草丈はやや短く(同比97%)、㎡あたり茎数は少なく(同比83%)、葉数は平年並(同比99%)、葉数はやや少なく(同差-0.2葉)となりました。6月は気温が高い～かなり高く、日照時間も多く推移したことから、停滞していた生育が回復傾向となりました。

7月

7月5日の草丈は平年並(同比100%)、㎡あたり茎数は平年並(同比98%)、葉数はやや淡く(同比97%)、葉数はやや少なく(同差-0.2葉)となりました。7月15日の草丈はやや長く(同比104%)、㎡あたり茎数は平年並(同比99%)、葉数は平年並(同比98%)、葉数は平年並(同差-0.1葉)となりました。高温により生育が進み、この時期すでに幼穂形成期を過ぎていたほ場が多く見受けられました。定点調査ほの7月15日の生育データを用いた生育栄養診断では、生育が過剰とされるV型・VI型の地点が多くなりました。7月25日の草丈は長く(同比111%)、㎡あたり茎数は平年並(同比98%)、葉数は平年並(同比98%)、葉数は平年並(同差+0.1葉)となりました。

8月

幼穂形成期が早かったことに加え、7月中旬～8月上旬の気温がかなり高く推移したことから、出穂期は7月30日(同早4日)と平年より早くなりました。その後の8月中～下旬は気温が低く、日照が少なく推移したことから登熟は緩慢に進みました。

9月

9月中旬から10月上旬にかけては少雨・多照で推移したことから、刈取始期は9月19日(同差早1日)でやや早く、終期は10月3日(同差早7日)でかなり早くなりました。

作柄概況

水稲定点調査ほにおける収量(篩い目1.90mm)は平年よりやや多い600kg/10a(同比102%)でした。収量構成要素を見ると㎡当たり穂数は447本(同比100%)と平年並、一穂粒数は72.3粒(同比105%)、㎡当たり粒数は32.3千粒(同比106%)でともに平年より多くなりました。その結果、登熟歩合は79.9%(同差-6.9ポイント)と低く、千粒重は23.1g(同比102%)とやや重くなりました。

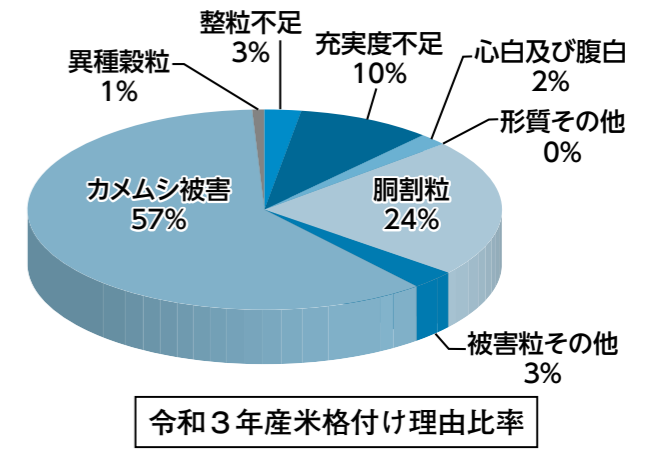
調査地点ごとの収量については、気象の影響を大きく受け、穂数不足や倒伏の影響で同比72%となった地点が見られた一方、春先から茎数を順調に確保できた地点では同比117%となるなど、ほ場間差が非常に大きくなりました。

J A秋田おぼこにおける令和3年12月22日現在の品位等検査結果(水稲うるち玄米)は、1等米比率98.6%となっています。前年よりも着色粒(斑点米カメムシ類)が多くなっており、次いで、胴割粒や充実度不足による落等が目立っています。

令和3年12月8日に東北農政局が公表した秋田県の米の収穫量は591kg/10a、県南地域の収穫量は598kg/10aで、ともに作況指数「102」のやや良でした。
※収穫量は篩い網1.70mmベース

J A秋田おぼこ管内1等米比率(令和3年12月22日現在)

大曲	99.8%	角館	98.0%
協和	97.7%	西木	93.6%
西仙北	98.7%	田沢湖	97.7%
神岡	96.8%	千畑	100.0%
南外	99.7%	仙南	98.3%
仙北	97.6%	六郷	99.8%
中仙	97.9%	全体	98.6%
太田	97.9%		



	玄米重 kg	穂数 本/㎡	一穂粒数 粒/穂	㎡当り着粒数 千粒/㎡	登熟歩合 %	千粒重 g
本年値	600	447	72.3	32.2	79.9	23.1
平年比・差	102%	100%	105%	106%	-6.9	102%
前年比・差	100%	104%	103%	108%	-4.7	104%

病害虫の発生状況

いもち病

BLASTAM(アメダスデータを用いた葉いもち発生予測プログラム)において、6月25日頃と7月10日頃に感染好適日がおとずれており、一部ほ場で多発しました。梅雨明け後の好天により、その後の発生は抑えられましたが、お盆過ぎの天候不順により、葉いもちの発生が多かったほ場を中心に、穂いもちの発生が確認されました。病害虫防除所が7月4～5半旬に実施した調査によると、葉いもち発病株率・発病地点率は平年よりやや高く、上位葉の葉いもち発病株率・発病地点率は平年よりやや低い、という状況でした。

紋枯病

本年は出穂期が早かったものの、出穂後の気温が低く推移したこと、生育期間をとおして茎数が平年よりやや少ない～平年並で推移したことから、少発生に抑えられました。

斑点米カメムシ類

病害虫防除所から、斑点米カメムシ類についての防除対策情報が5月7日と8月19日に、注意報が8月6日に発表されました。本年は斑点米カメムシ類の発生時期がやや早く、発生量も注意報が発表されるほど多くなりましたが、出穂期10日後頃の適期防除に加え、出穂期24日後頃の追加防除も多くのほ場で実施されたことから、斑点米カメムシ類による着色粒の発生は低くなっています。